が、なお最後に、未熟不適任な筆者の誤解、盲蛇におじざる暴言があれば、著者に對し深く寛恕を乞う次第である。

（昭和廿五年四月國土社刊、A5、二一九頁、二五〇円）

——黒田俊雄——

堀江英一著「西洋經濟史」

終戦後、「本源的蓄積過程における國家權力の問題」（季刊社會科學第一集）「絶對主義の經濟段階」（時論、一九四九・五）「原始蓄積の類型」（經濟評論、一九四九・六）「初期獨占」（經濟論叢、第六十四巻第四、五、六合併號）等の、ヨーロッパー特にイギリスの初期資本主義に關する諸論文を發表してイギリス資本主義成立史に鋭いメスを加えて來られた著者が、最近西洋經濟史の講義錄を整理した本書を公けにせられた。勿論僅々二百三十頁を出でない概説書である。ところが本書は表題の示す如きヨーロッパの一般經濟史であるのではなくて、「イギリス（實は更に狭くイングランド）の資本主義形成過程」をほゞ十四世紀初め頃から十九世紀中葉に至る五世紀間に亘つて分析したものである。從つてこれは、イギリス資本主義成立史であると云える。既にわれ〳〵は此の領域に於て本位田詳男博士や野村兼太郎教授等の秀れた業績、殊に大塚久雄教授の古典的名著を持つている。して見れば、此等の諸成果を前にして著者は如何なる意圖の下に自らを位置づけようとされるのであろうか。著者自身の聲を聞いて見よう。「……その際私は資本主義の發展がつぎつぎと生み出して來る發展段階に從つて、それぞれの發展段階が持つ生産關係＝階級關係をあきらかにし、そしてその生産關係＝階級關係がいかにそれぞれの時代に特有な政治形態を規定するか、を分析しようと努めた。……わたしはこれまでの通史としては珍らしい計画——イギリス近代政治經濟史をなしとげようとした。」更に「資本主義の發展過程は……政治過程を規定する基礎過程である。經濟史は政治經濟史であることが必要である。蓋し政治過程に於ける闘爭こそ經濟過程に規定された階級對立のヴィヴィドな反映であるからである。」即ち著者の意圖する所は、(一)先づ資本主義の各發展段階に於ける生産關係＝階級關係を分析し、(二)次にかゝる生産關係＝階級關係が政治過程を如何に規定するかを究明し、通史としては未開拓のイギリス近代の經濟史ならぬ政治經濟史の輪廓を描くことであつた。思えば戦後に發表された著者の諸論文の中心テーマは、絶對主義を資本主義のどの發展段階のものとするかという問題をめぐる下部構造と上部構造との聯關にあつたのであり、本書は著者が西洋經濟史研究に當つて年來抱いて來られた新しい方法の通史への擴大であると云うことが出來るであろう。

それでは著者はイギリス近代政治經濟史をどのような構想の下に描き出そうとするであろうか。先ず著者は、資本主義の本質を産業資本の存在に求め資本主義を産業資本主義と規定される。從つて資本主義の發展段階をあとづけようとする場合當然産業資本の發展段階を規定することが主要課題となつて來なければならない。その場合著者は指標をマルク

スの所謂「相對的剰餘價値の生産」に求め、生産力水準の發展とそれに伴う生産形態の推移によつて資本主義の發展段階を規定されんとし、レーニンに從つて、㈠小營業段階、㈡マニュファクチュア段階、㈢工場段階、の三つの發展段階を區分される。卽ち㈠小營業段階は手工業生産に於ける生産者と消費者との直結が破れ兩者間に買占業者が現われ生産は小商品生産段階に入るが、そこには必然的に近代的資本關係への分化も内包しつゝも未だ農工は未分離に結合し（農本工副）、未だ封建的生産樣式とそれに寄生する前期的資本のわく内にあるもの、㈡マニュファクチュア段階に於いては一方では資本家的マニュファクチュアが分業と協業とを採用して固定的な形態を取るに至ると共に、他方資本家的マニュファクチュアを中核として資本家的家内勞働が大量に出現するところの所謂「資本家的マニュファクチュアと資本家的家内勞働」の段階であつて、農工は分離し、もし兼營の場合には工本農副の關係に移行して來る。㈢工場段階はマニュファクチュアが道具の代りに機械を採用して工場となり、全社會的生産はその根柢から變革され、非資本主義的領域の資本主義領域への編入過程は一應完成され、資本關係の確立される時期、とされている。かゝる發展の三段階はイギリス資本主義形成史上に如何に定置されるか。著者によれば第一段階は十五世紀から十六世紀半ばまで、第二段階は十六世紀半ばから十八世紀最後の三分の一期まで、第三段階はそれから一八三〇年までとされ、本書は一應産業革命まで（を含めて）で敍述が打切られている。

從來わが國に行われて來た資本主義發展段階區分に於いては、商業資本主義時代――工業資本主義時代或いは初期資本主義時代――産業資本主義時代の如く、工場段階以前が一つの發展段階として一括敍述されて來た。それに對して著者はレーニンに從いつゝその中に一つの段階に一括解消し得ない特殊な發展段階として小營業とマニュファクチュアの二段階を設定されるのであつて、この點にも著者の本書に於ける――實は從來からの――新しい主張の一つが見出されるのである。

第一篇に於ける序論的な敍述の後、第二編で資本主義の歷史的前提として封建經濟の分解過程が、第三編より第五編に亘つて資本主義の三つの發展段階と之に對應せる政治的過程が取扱われる。先ず第二編に於いて封建經濟の分解過程をマナーの分解と之に對應するギルドの展開過程に求め、勞働地代の貨幣地代への轉化＝金納化こそ資本主義への出發點であるとなし、コスミンスキーやポスタンに從い乍ら之を分析すると共に、一方都市の發達に非封建的分子の成長を認め、封建農村の商品經濟化、農奴解放に作用し乍ら封建社會に分解作用を及ぼすものとし都市の現實的内容たるギルドの展開を商人ギルドからクラフト・ギルドへの分解の過程の中に捉え、そこに商工業の農業からの獨立、都市と田舍との分離による社會的分業の發達を理解される。かゝる金納化と都市の發達は文字通り封建社會＝封建的階級關係の分解を意味するものであるが、著者はそれの集中的表現を一三八一年のワット・タイラーの叛亂の中に認めている。更に、封建社會の基盤となつていた騎士階級の、上層自由土地保有者、富裕小作人、土地を買い入れた市民等を包むジェンツルマ

ン階級への轉移と、彼等の議會への進出てう事實の中に分權的封建制度から集權的封建制度＝絶對主義形成への方向を觀取されようとする。

第三篇、資本主義の第一段階たる小營業即ち工業に於ける小商品生産は「民富」の發展と分解に對應する生産形態であり、「民富」の形成を富農と貧農との分化に、その分解を綜割運動に見、之をイギリスに於ける本源的蓄積の本質的契機とされた後、小營業段階をクラフト・ギルドの變質過程と農村工業の展開てう相對立する二側面に於いて檢討される。即ちアンウィンの所謂「十五世紀型特權組合」Fifteenth Livery Company with Yeomanry を取り擧げギルドの解體とギルド延いては自治都市に於ける寡頭支配體制成立過程を小營業段階に於けるギルドの特質を見ると共に、他方農村に於ける毛織物工業の滲透發達及びその構造的特質を明らかにし更に「地方工業獨占」に言及して工業に於ける都市と農村との對立、資本主義への傾斜をめぐる商業高利貸資本と生産者との相剋を說かれている。それではこの段階に對應せる政治形態はと云えば、それは絶對主義であるとせられる。絶對主義は封建社會に於ける領主とギルドの公權を剝奪しそれを國王の絶對主權に集中するところに成立するが、その爲に國王は二重の相互牽制――一つには封建領主と商業高利貸資本、二つには封建領主・商業高利貸資本と農民、小工業者――を行わしめる。しかし絶對王制の本來の階級的基礎は土地貴族と貨幣貴族であつて決してブルジョア關係にあるのではない。從つて土地・貨幣貴族と新興ブルジョアジーとの鬪爭が始まるや絶對主義は前者に味方し後者を抑壓するに至るとし、絶對主義に「啓蒙的」なものから「反動的」なものへの轉化を認められる。

次に第四編に於てマニュファクチュア段階を敍述するに當つて著者は單なるマニュファクチュアの展開過程としてでなくマニュファクチュアの二つの類型の對立的發展として取扱われ、一方に商業高利貸資本から轉化し絶對王制と結託せる特權的マニュファクチュアを、他方に「小親方」特に農村工業の中から前者の抑壓を押し除けて成長して來る私的マニュファクチュアを置き、その展開狀況と構造的特質を明らかにすると共に特に特權的マニュファクチュアと歩調を合わせたものとして特權的貿易會社を取り擧げて、エリザベス朝に始まりピュリタン革命で廢止される所の下からの資本主義に對する上からの攻擊であつた所謂初期獨占を重視される。更に此の段階に於ける階級關係を、マニュファクチュア投入期たるエリザベス朝のギルド型態たる「エリザベス朝組合」Elizabethan Company with Yeomanry の成立を經てスチュアート朝の、「スチュアート・コーポレーション」Stuart Corporation of Small Masters に至るギルドの變質過程の側面から總括される。そして此の段階に於ける政治過程として二つのブルジョア革命と重商主義とを擧げ、ピュリタン革命――護民官政治――王政復古――名譽革命の階級的基礎の推移を明らかにし、重商主義政策を本源的蓄積政策とされ革命を境としてローヤル・マーカンテイリズム royal mercantilism とパーラメンタリー・コルベールティズム parliamentary Colbertism の二つを區別され、特に外國貿易の領域に於けるトーリー黨の自由貿易論とホイッグ

黨の保護貿易論の對立を指摘される。

最後の第五編に於いては、工場制確立過程と相互媒介的に産業資本確立過程の兩翼をなす農業領域に於たる資本主義過程たる第二次綜割運動が顧みられ、それが科學的農法を適用する爲耕作改良を目指した大土地所有制の確立である點に第一次のそれとは異つた本質的性格が與えられ、次に工業革命を綿織物業に於ける諸機械の發明と鐵鑛業に於ける新たな製鋼法の發見に、又交通業の變革を運河鐵道海運の發達に跡づけた後に、一八三二年の選擧法改正と四六年の穀物條令の廢止及び翌年の十時間勞働法の成立等の諸事件が、この段階におけるブルジョアジーのまがうことなき勝利を表わす政治的過程として取り上げられると共に、産業資本の確立に伴つて生じて來る勞働者と資本家との階級對立並びに勞働者の階級的自覺に發する勞働者運動が、オーエン主義、チャーティスト運動を經て十九世紀の半ばまで續けられている。

以上は各篇章に於ける個々の敍述內容についての克明な追求と批判ではなく、本書の性格や筆者の能力、わけても紙數の制限に妨げられて唯本書の構成を多少浮彫的に示して見たものに過ぎず、拙い筆はこゝにさえも本書の輪廓を描き出し得ては居ないであろう。本書はその根本方向としてマルクス、レーニンを狙いそれを肉附けるためにアンウィン、アシュレーその他幾多ヨーロッパ諸先學の、又大塚氏をはじわが國に於ける諸々の研究成果を隨所に引用し初學者にとつてはその點便利な書物となつている。特に小營業、マニュファクチュアの二段階の敍述に際してはアンウインに據る所が多いようである。又此の部分は著者が日常研鑽を重ねられている領域だけに他の箇所に比して秀れているように思われる。又著者の階級史觀は、その當否は別として全篇を通じて一應一貫性を保ちえて居り、經濟と政治との聯關の追求に於いても亦大した破綻を感じない。大塚教授がマニュファクチュア段階を史家的に設定することによつてわが國の西洋經濟史學の研究に大きな足跡を殘されたのであるが、著者がそれ以前の段階として小營業概念を抽出した一事は一應注目せられてよいのではあるまいか。問題史的考察の度が薄く、今少しの感を抱く所少しとしない。その點に於いて大塚教授に未だ及ばないが二百數十頁の通史にそれを望むのは無理であろうか。今までの諸著書諸論文に尖鋭な分析力と强靱な綜合力を見せて來られた著者に、しかし乍ら、將來を期待するものは筆者一人のみではないであろう。

——川村滿穗——

（三笠書房　經濟學全書　第三卷　一六〇円）

Ernst Hüttmann;
Verkehrsgeographische Probleme am Beispiel der Eisenbahnen Schleswig=Holsteins.
Hamburg 1949

本書はリュトゲンス教授のもとに戰爭中（一九四一）に設立されたハンブルグ大學の經濟